

セキュアな環境における 生成AIの校務利用

令和7年度 実証研究事業成果報告

令和8年3月
宝塚市教育委員会



手塚治虫記念館
Osamu Tezuka Manga Museum

宝塚大劇場
Takarazuka Grand Theater

阪神競馬場
Hanshin Racecourse

● 小学校 ● 中学校 ● 特別支援学校



人口
約 220,000 人

学校数
小学校23校/中学校12校/
特別支援学校1校

児童生徒数
約 16,500 人

教職員数
約 1,200 人

宝塚市の教育の基本目標

自分を大切に 人を大切に
ふるさと宝塚を大切に作る人づくり

教育情報システム全体を ゼロトラスト型のフルクラウド環境で運用

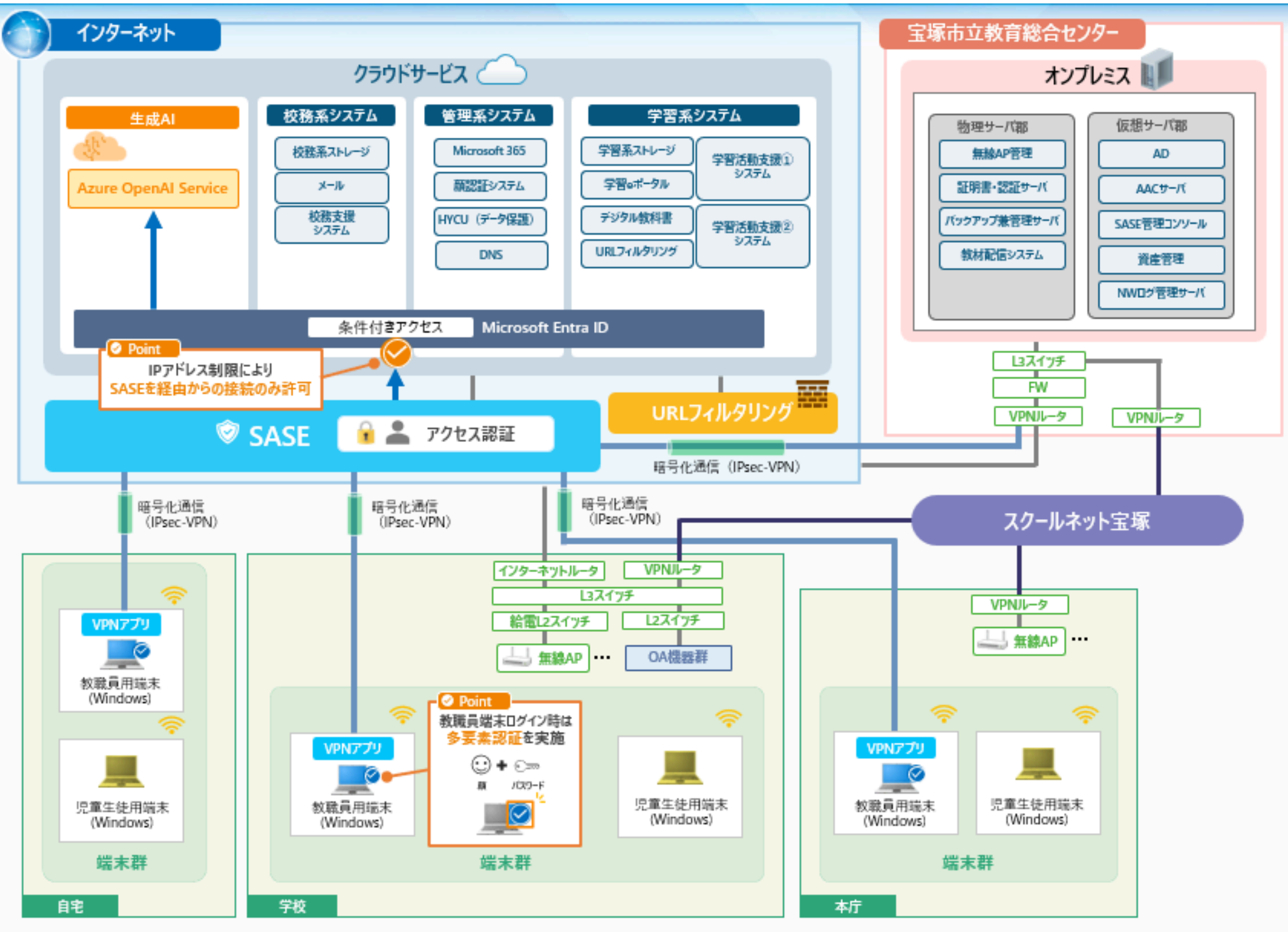
令和4年度 校務系・学習系のネットワーク統合

- ・校務と学習を1台の端末に
- ・場所に依存せず教育ネットワークへアクセス可能なロケーションフリー化の実現
- ・個人端末からの校務クラウドへのアクセスは制御

令和6年度 統合型校務支援システムへ移行

- ・従来のオンプレミス型校務支援システムからクラウド型へ移行

ゼロトラスト型教育ネットワークにより、校務データを安全にSky社提供の生成AIへ活用可能



〈宝塚市の教育ネットワーク図〉

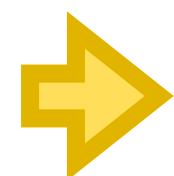
1年目（令和6年度）

【成果】

- ・ 通知表所見作成など一部校務での確かな効率化
- ・ 全校への訪問研修実施による認知

【課題】

- ・ 活用が個人レベルにとどまりやすい
- ・ 的確な回答を得るための蓄積データの不足
- ・ AI解析を阻む「人間向けレイアウト」
(例：Excelのセル結合、表記の揺れ「1年1組1番／1-1-1」など)



生成AIを「知る・試す」段階にとどまる



2年目（令和7年度）

「個の試行」から
「組織の標準化」へ

校務の標準化と組織的活用

- ・ 生成AIによる校務ノウハウの可視化
- ・ 教育データを活用したデータ駆動型の児童生徒理解
- ・ 経験年数に依存しない校務の質の確保

AIを「一部の得意な先生」の便利なツールに留めず、誰もがその恩恵を享受できる仕組みの構築を目指した2年目へ

課題

ノウハウや判断基準が個々の経験の中に蓄積され、共有・継承が十分に進みにくい校務環境

➔ 教職員の業務多忙化

学校現場の課題

- ノウハウが個人に蓄積されやすい
- 業務が個人に依存しやすい
- 情報共有が十分に進みにくい

知見が組織内で循環しにくい校務環境が校務負担の増大に

目的

個々の経験に頼る校務から、知恵が共有され高め合える校務体制へ

校務での生成AI活用の目的

- 業務手順や判断基準の言語化
- 校務ノウハウの蓄積と共有
- 校務の標準化による、子どもと向き合う時間の創出

誰が行っても一定の質が確保される校務体制の構築

手段

- ①生成AIの活用による知見の蓄積・共有
- ②プロンプトを、教職員の経験や判断を言語化した知見として整理
- ③プロンプトの蓄積・共有による校務ノウハウの標準化

生成AIの校務活用

- プロンプトボタンの整備
- ベテラン教職員の知見を反映したAI「ベテラン教師 青空先生」

知見が自然に循環する校務環境の構築

- 生成AIを校務効率化だけでなく、知見を循環させる仕組みとして活用する取組を行う
- 創出された時間を児童生徒と向き合う時間へつなぐことで、教育の質の向上を目指す

2年間の取り組み成果①（システム環境の構築）

セキュアな活用環境の優位性

一般的な生成AI

【セキュリティ】
情報漏洩リスクあり
(マスキング必須)

【ファイル連携】
都度アップロード必須
(ファイル数制限あり)

【利用制限】
各種機能に制限回数
あり

Sky社提供の生成AI

【セキュリティ】
情報漏洩リスクなし
(マスキング不要)

【ファイル連携】
SPO直接連携
(ファイル数制限なし)

【利用制限】
各種機能に制限回数
なし

機微データの安全な活用



学年	校名	生徒ID	性別	学年
R07.07.03	久し	3日		
R07.06.30	3日			
R07.06.20	心の			
R07.06.19	週明			
R07.06.06	心の			
R07.05.26	朝が			
R07.05.23	昨日			
R07.05.22	登校			
R07.05.21	登校			
R07.05.16	1日			
R07.05.12	1日			
R07.05.08	1日			
R07.05.02	1日			
R07.05.01	1日			
R07.04.28	1日			
R07.04.25	1日			
R07.04.24	1日			
R07.04.23	1日			
R07.04.22	1日			

〈校務支援システムのダッシュボード〉



選んでください

マイプロンプト1 マイプロンプト2 マイプロンプト3 所見作成 会議料校正

繁忙期・業務振り分け 特定児童の支援策 懇話会の話題提起 番号によるグループ分け 子どもの熱中症対策

R07.07.03	久し
R07.06.30	3日
R07.06.20	心の
R07.06.19	週明
R07.06.06	心の
R07.05.26	朝が
R07.05.23	昨日
R07.05.22	登校
R07.05.21	登校
R07.05.16	1日
R07.05.12	1日
R07.05.08	1日
R07.05.02	1日
R07.05.01	1日
R07.04.28	1日
R07.04.25	1日
R07.04.24	1日
R07.04.23	1日
R07.04.22	1日

※このチャットは、接続いただいた校務データを利用して回答を生成します。
入力情報が外部に出ることはありませんので、個人情報も入力いただけます。

校務支援システム内の個人情報を含むデータであっても、次の手法で安全に取り込み・活用が可能

- ファイルの直接格納
- コピー&ペースト
- 画面キャプチャの読み込み

機微データを活かした客観的な分析

①データ駆動による児童生徒理解



教師の経験則にAIの多角的な分析を加え、より客観性の高い実態把握へ

②校務文書作成の効率化



様子メモ等を参照し、通知表所見等の素案を即座に生成

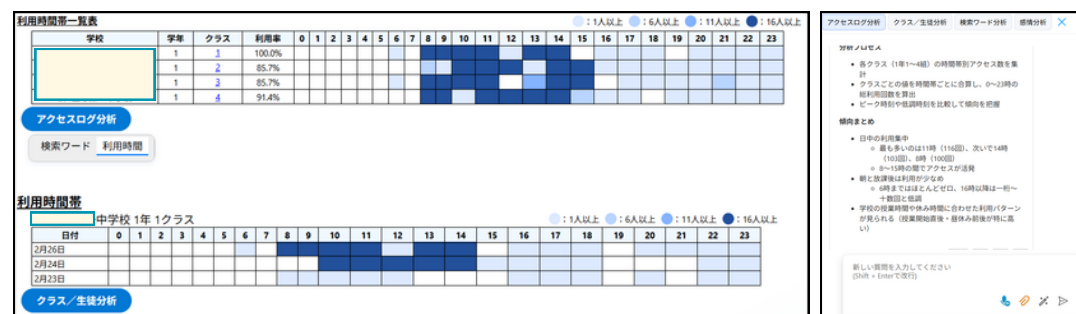
③校務におけるシミュレーション



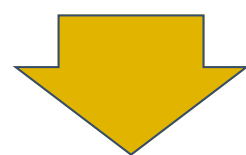
学級編成案の検討、家庭訪問ルート作成、保護者対応のロールプレイなど、実データに基づく高精度な計画立案と対人スキルの向上

- 校務データの直接連携により、高精度な分析・回答が可能な基盤に
- 人間が失念していた過去の知見も活用でき、経験に依存しない「知見の継承」を実現する校務の姿へ

アクセスログ

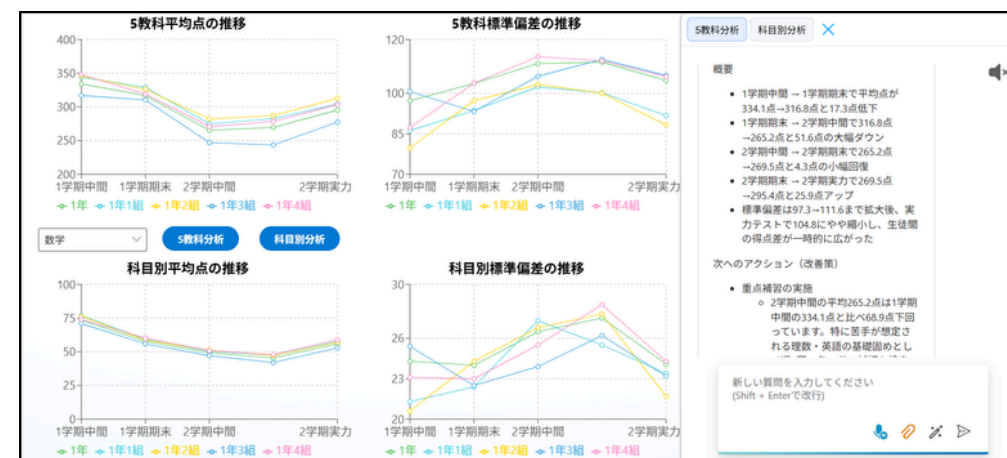


- 1人1台端末の活用時間を学級、個人単位で可視化
- 児童生徒の検索ワードの傾向を把握し、関心や状況の把握に活用

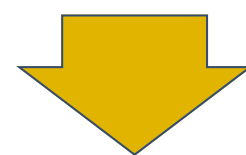


端末活用時間や検索ワードの分析を通じて、端末活用状況や関心の傾向を把握し、指導に活用

成績推移分析

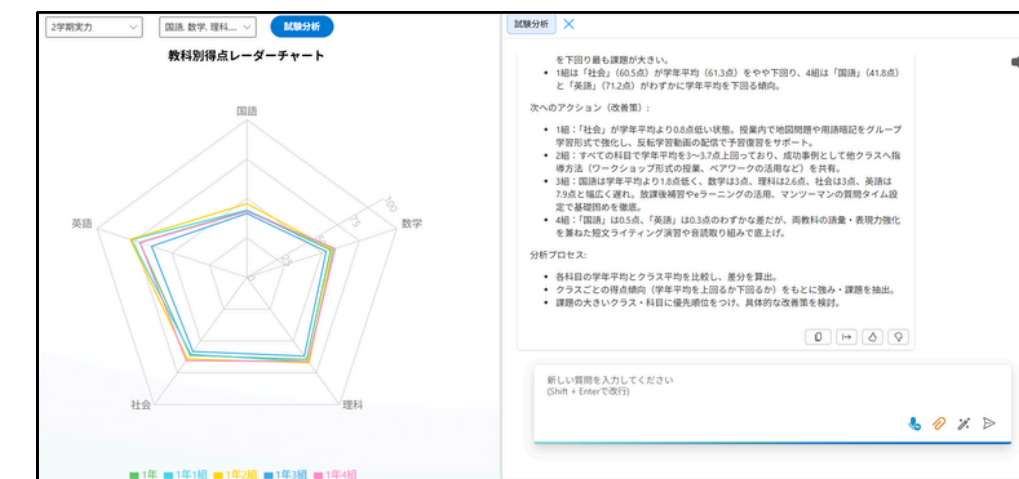


- 各種テストの点数推移を基に、AIによる傾向分析が可能
- 5教科、科目別の分析や学級ごとの分析が可能

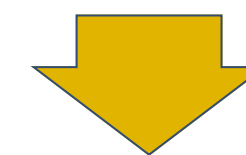


テスト点数の推移をAIが分析し、学習傾向を把握して指導改善に活用

試験分析



- 学年、学級、個人の情報を一元的に管理
- 個人の偏りの視覚化が容易に



学年、学級、個人の成績を可視化し、客観的な実態把握を通じて指導改善を支援

2年間の伴走がもたらした「組織の変容」

教職員のAIに対する心理的障壁が下がり、利用の裾野は確実に拡大

学校組織の文化変容の兆し

- 個人の試行 → 標準化に向けたモデルケースの創出
- 自力で検索 → まずAIに相談する文化

校務の高度化・標準化

- 主観を補完する多角的な客観視点
- ノウハウの可視化に向けたプロンプト活用
(属人化解消への第一歩)

教育行政業務の効率化

- AIによるマニュアル即時参照で現場の自己解決力が向上
- システム操作等の問い合わせ対応負担が大幅に減少

システム環境

- 直感的なUIの導入
- SPOと連動した根拠のあるレスポンス
- 組織の知見を継承する専門特化型AI
- データ駆動型教育を支えるダッシュボード

伴走支援の実施

- 【導入支援】
専門講師による実践的な研修会
- 【現場支援】
指導主事による全校訪問型の研修会
- 【継続支援】
Microsoft Teams上に常設した
知見共有・相談コミュニティ

利用者数の増加

312名 → **1,013**名

(令和7年度4月末時点) (令和7年度2月末時点)

令和8年3月2日~3月6日の1週間の利用総数 **11,656**回

マインドセットの変化

未知の
技術

まずAI
に相談

仕組みが整い
活用の土壌が広がる環境へ



学校間・教職員間における 「活用格差」の拡大

・全体波及における利活用の格差

全体の利用者は増加したものの、積極的な学校・教職員とそうでない層との間で、取り組みの温度差や利用率の格差が依然として見られた

・現場の「入力」という高い壁

データのデジタル化がAI活用の前提だが、現場では依然として手書きの即時性を超えられない。格納作業の「ひと手間」が壁となり、AIの利益を享受する手前で利用が止まってしまっている。

環境整備により確かな効果が出た一方で、今後は「入力の負担」を極限まで減らし、誰もが迷わず一定の質で活用できる標準的な活用パッケージの確立が必要である

「精度の高い回答」を導く データ蓄積の重要性

・公的データの限界

指導要録等の公的な記録だけでは、個々の児童生徒の細かな変化や、日々の具体的な様子を捉えた深い分析には不十分

・数値化しにくいデータの重要性

精度の高い回答を導くには、日々の「気づき」や「活動ログ」等の、数値化しにくい生きた情報のデジタル蓄積が不可欠

AIの回答精度を真に高めるためには、数値化しにくいデータの価値を最大化し、実務（所見作成等）に直結させる仕組みの確立が必要である

「知見を共有する組織文化」 への深化

・個人所有から組織共有へ

長年培われた「ノウハウの個人所有」という文化を尊重しつつ、それを組織全体で分かち合い、高め合える文化へと深化させていくには、まだ時間を要する。

・多忙と「遠慮」による発信の停滞

Teams等の共有の場を用意しても日々の多忙さや「わざわざ発信するほどでは」という心理的な壁があり、当初想定していたような活発な交流にまでは至らなかった。

共有基盤は整ったものの、自発的な知恵の循環には、多忙な現場に配慮し、個人の知恵を安心して分かち合える雰囲気作りが必要である

AIが担う
「業務の効率化」

最高の助手としてのAI

時間と心のゆとりを創出し、
教員が本来の業務に集中でき
る基盤を作る

教員が注力する
「教育の質の向上」

教育の専門家としての教員

子ども一人ひとりと
向き合う時間を最大化し、
教員にしかできない心の通った
指導で、きめ細やかに支援する

2年間の実証で築いた「活用の土壌」を礎に

個の知恵が組織で循環し続ける 宝塚市の新たな「校務の日常」の実現へ

